

海軍ニュース：展示模型から見える中国空母“遼寧”の戦闘力

漢和防務評論 20150202 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

南アフリカでのエアショーに中国海軍が空母“遼寧”の模型を展示しました。この展示は、空母の輸出を狙ったものではなく、建造技術を誇示するためであったようですが、漢和防務評論誌は、この模型が実物を忠実に表現していることを前提として同艦の戦闘力を評価しています。結論は、搭載ヘリと戦闘機の同時離発着は困難ということのようです。

KDR 編集部、南アフリカ清谷信一、バンコク平可夫特集記事：

CSOC (中国船舶重工国際貿易有限公司) は、南アフリカ航空ショー (AAD) で初めて空母“遼寧”の模型を展示した。これは海外での初めての空母遼寧の展示であるが、当然空母の輸出を狙ったものではない。消息筋によると、このような大型水上艦でも建造できる能力を誇示しただけであるようだ。しかしこれは軍艦模型であり、展示ケースには“中国人民解放軍海軍”と書かれていた。もしこれが正確な模型であるとすれば、注目すべき点は以下の通りである：

KDR は、2009 年に香港で展示された空母“ワリヤーグ”の模型と今回 AAD で展示された模型を詳細に比較してみた。両者を比較することによって正に大連で建造中の国産空母第一号の若干の技術的特徴が分かるかもしれないと思ったからだ。AAD に展示された遼寧の模型の推進軸は依然として 3 軸、5 枚ペラであるが、ペラの寸法は 2009 年の展示模型より大きくなっており、また湾曲している。これは新型のスクリュであることを示しており、ワリヤーグのウクライナ製スクリュに比べ精巧で、気泡発生を減じるのに有利である。このスクリュは大連船用推進器工場 (DMPC) で生産された可能性がある。同工場は大量の西側設備を使用している。例えばドイツ製の 5 軸連動デジタルフライス盤である。衛星写真によると、同工場は拡大の一途をたどっており 10 年前に比べると、工場の面積は約 2 倍になっている。同工場は、直径 11 メートル、重量 100 トンの大型スクリュを生産することが出来る。

中国は、863 計画で CKX5680 型 7 軸 5 連動デジタルフライス盤を自力設計した。その結果、直径 8 メートル、高さ 2 メートル、重量 100 トンのプロペラブレードを生産できるようになった。中国の主要な水上艦艇のスクリュは全てこのフライス盤で加工されたものである。

しかし不思議なことに、大連船用推進器工場は CSIC (中国船舶重工集团公司) に属しており、CSOC には属していない。このことは、今後江南造船工場で建造される第 2 艘目の国産空母のスクリュも同工場の製品を採用することを意味する。同工場が一度に溶鋳炉で溶かす能力は 110 トンに達し、クレーンの最大起重能力は 100

トンである。冷戦時代、水上艦、潜水艦のスクリュを生産する加工機械は社会主義諸国への輸出は禁止されていた。

艦載機の搭載状況を見ると、J-15 戦闘機だけでなく、Z-9、Z-18 ヘリも搭載している。ここで説明する必要があるが、たとえ模型であっても、中国製は製品の精密さ精巧さで西側諸国、日本及びロシアの製品に比較すれば劣る。模型では 14 機の J-15 が艦上に置かれていた。これは甲板面積から見て最大限度であろう。また 4 個所のヘリスポットがあり、これは 4 機のヘリが同時に離着陸できることを意味する。しかしスキージャンプ台後方のヘリスポットを使用する間は J-15 の離着陸は出来ない。3 番目のヘリスポットを使用する間は 3 番目の離着陸スポットからの J-15 の離着陸は出来ない。3 番目の J-15 の離着陸スポットからの滑走路の長さは 195 メートルで最長であり、この離着陸スポットを使用すれば、J-15 は、搭載燃料を多くし、又は対艦ミサイルを搭載することが出来るようだ。模型を見ると、2 番目のヘリスポットを使用する間は、3 番目の離着陸スポットから離陸する J-15 に影響を与える可能性が極めて高い。このほか第 2 番目と 3 番目のヘリスポットを使用する間は J-15 は着陸できない。

したがってもし J-15 の離着陸を優先するならば、運用できるヘリスポットは船尾にある 1 個所だけである。これらのことから、遼寧の艦橋が相当大きく、甲板も狭いことから、艦載機全体の迅速な発着艦能力は高くないと思われる。船体のバウソナーの大きさは 2009 年の香港の模型とほぼ同様であり、このことから遼寧号のソナーのレベルは、ワリヤーグと基本的に同レベルと考えられる。

以上